2024年8月11日（日）永眠者記念礼拝説教

『**キリスト教の死生観**』井上隆晶牧師
創世記2章15～17節、Ｉコリント15章50～58節

❶【戦争と原爆を記憶しよう】

8月は戦争と平和について思いを巡らす月です。世界で初めて8月6日には広島に、9日には長崎に原爆が落とされました。唯一の被爆国として、原爆で亡くなった多くの人の死を記憶し、また戦争による多くの犠牲者によって平和が与えられたことを思い、黙祷を捧げたいと思います。(黙祷)
NHKで戦争証言の番組を見ました。広島に原爆が落とされた３時間後に写された有名な「御幸橋の写真」があります。爆心地から 2.3 キロ離れた橋に多くの人が避難してきました。中には中学生が多くいたと言います。この写真に写った人の中で生き残っている人たちが、当時の様子を証言をされていました。それは悲惨なもので、本当に辛かったろうな、苦しかったろうなと思います。彼らはその日は普段のように工場に働きに行っていました。そこへ原爆が落ちました。最初は何が起こったのか分からず、ただ周りの多くの死体を見て、「自分は運が良かった」と思ったそうです。**自分がその時代に生きていたら、耐えられるだろうかと思います。戦争で亡くなった人たちのことを忘れないようにと言うのは、人間の罪深さを忘れず、生かされている恵みを当然だと思わず、いつ召されても良いように生きなさいということだと思います。**先日、宮崎で地震が起こり、南海トラフ地震に気をつけよと言われました。「気をつけろ」と言われても何が出来るでしょう。水を買い占めている人がいます。人間の力で、自分の寿命を延ばすことが出来るのでしょうか。死はいつも隣におり、誰も明日何が起こるか分かりません。そんな中、キリスト教徒としてどう生きたら良いのでしょう。

❷【キリスト教の死観とは】

まず、死について考えてみましょう。死の定義がされなければ、生きる定義も定まらないからです。聖書の中で最初に「**死**」という言葉が出てくるのは、創世記です。エデンの園の中央に命の木と、善悪の知識の木がありました。神は人間をエデンの園に置き「**善悪の知識の木からは決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。**」（創世記 2：17）といわれました。聖書で「命」とは神のことですから「命の木」とは神のことであり、命の木から取って食べるとは、神によって生きる生き方を象徴しています。一方、「善悪の知識の木」とは、神から離れる生き方を象徴しており、善と悪を神に聞かず、自分で判断して生きる生き方のことを象徴しています。**枝が幹から離れたら枯れるように、命である神から離れた人間は死にました。**しかし聖書を見るとアダムとエバは生きています。魂はすぐに死んだのですが、肉体の死はすぐに起こらず、時間と共に崩壊していきました。人間は魂と肉体の合成物なので、死もこの二つに及んだのです。**神は死を創**

造されませんでした。死をこの世界に持ち込んだのは人間であり、人間の罪です。キリスト教徒は、神を抜きにして死を考えません。死とは神からの分離なのです。しかしこの世の人は、死とは生物学的なものであり、宗教とは関係なく、自然現象だと考えています。

❸【キリスト教の生観とは】

死が神からの分離ならば、命とは神と結ばれることにあります。具体的には、イエス様に結ばれることです。神は近づけない光であり、私たちには耐えられないからです。しかし神よりの神、光よりの光であるイエス様に結ばれることはできます。それが洗礼です。イエス様は「**わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。**」（同 11：25）と言われました。自分のことをこのように言われた者は誰もいません。洗礼によって、私たちはキリストに結ばれて一体となり、私たちの魂は生き返り、来世で死なない身体をいただくことにより、永遠に生きる者となり、救いは完成します。このようにキリスト教では、生きるとは、神と結ばれることだと考えます。

●逢坂元吉郎はこう書いています。「キリストの死は、犠牲の死であると共に、甦りを教えるための死であった。それは叩いても蹴っても、どんなに苦しめられても、甦るものがあることを十字架の上で示し給うたのである。キリスト教は思想ではなく、道徳でもなく、主が先駆けとなって甦り給うたゆえに、われらも甦るという信仰である。…聖餐が教会の背骨である。…今日の教会は人の集まる所、道徳の説かれる場所、この世とわずかばかり違っている所である。聖餐を命がけで拝領して喜び、深き尊い神の像をおぼえるという神聖なものは棄てられてしまった。…ヘンリー・ニューマンのトラクト第９０号には、『キリストの体を食らう所、これがキリストの教会である』と書いてある。」

❹【この世をどのように生きるか】

死を生物学的なものと考えるなら、この世で肉体（生命）を長く保たせることが目標となります。医療が重視され、すべてを人間の責任として考えるようになり、医療ミスを厳しく問います。この世がすべてとなるのです。そこでは重度の障害を持って生まれた子、早死にをした者は不幸になります。**しかし死を、神からの分離であると考えるなら、神に帰ることが第一となり、神にのみ頼るようになります。神だけが人の罪を赦し、死を滅ぼすからです。また、この世ではなく天国に希望をもつようになります。**なぜなら罪を持つ人間がこの世を支配する限り、地上から戦争はなくならず、希望はないからです。平和運動くらいでは、人間の罪はどうにもなりません。キリスト教国でさえ、口では「神様」と言いながら、結局は政治と経済がすべてです。神によって生きるのではなく、人間の力で生きようとしています。神に聞かず、神に従わず、自分勝手に行っています。T さんの夫さんが TV を見ながら「神を簡単に持ち出すなあ」とあきれていました。バイデンさんが、イスラエルのネタニヤフ首相に「嘘をつくな。アメリカの大統領を馬鹿にする

な。」と怒鳴ったと言いますが、この世は嘘にまみれています。今のキリスト教会は初代教会から伝えられた死生観からずれているように感じます。死を自然現象として見ており、肉体を守ることが一番になっているように思えます。この世の平和だけを考え、来世とか、神の国を目標としていないように思えます。

●榎本保郎牧師はこう書いています。「使徒パウロは、かつてはキリストを肉によって知っていたとしても、今はもうそのような知り方をすまい、と語っている。肉のキリスト、人生の教師としてのキリスト、愛の実践者としてのイエスを知っていても、今の私の恐れや悲しみから私たちを救う力とはならない。いのちの主としてのイエスを知ってこそ、どんな時にあっても恐れない人生を生きる事ができるのであり、それはこの生まれつきの目では見ることはできない。…私たちの霊の目が開かれたとき、初めて神が私たちと共にいることを知り、神がこんなにも私たちを愛していてくださることに気づくのである。」

最近「イエス様が人を愛したように、私たちも愛しましょう」と語る教師が多いのです。これは道徳です。「愛すること」くらい言われなくても分かります。それが出来ないから教会に来ているのです。道徳では死を前にして何の力にもなりません。何もできないからです。死を滅ぼした神キリストにこそ希望があるのです。**私はこの世に希望をもっていません。私の希望はただ一つ。地に降られた神キリストであり、父と子と聖霊の聖三者です。「神はその独り子をお与えになったほどに、この世を愛された。」**（ヨハネ 3：16）と書かれています。この世とは、神が創造されたすべてです。その中に罪深い人間も入っています。神の愛と神の業にのみ私は期待をします。

この世は、舞台みたいなものです。与えられた本番というチャンスは一度だけ。この世界の第何幕目かに、自分の役目をもらい、その役を演じ終わったら、舞台を後にし、若い人に場を譲るのです。後戻りはできません。あっという間に終わるでしょう。私たちがいくら努力しても、効果は一時的であって、私たちの力でどうにかなるものでもありません。今できることを精いっぱいするだけです。

●逢坂元吉郎はこうも書いています。「キリストの『大いなる死』を上に見上げて、われわれの『死』は変わり、われわれの『生』も変わるのである。この『変わる』ということに信徒の喜びがある。われわれの死と生とを、キリストの死と生に変えて生きるのである。」

まさにその通りだと思います。自分では変われませんが、キリストに結ばれて、キリストに似た者になるのです。この変えられることに私たちの喜びがあります。パウロが語った神秘（奥儀）です。それに希望をもって、この世を生きましょう。